



会計利益情報の有用性：  
21世紀のパーспекティブ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-06-09 キーワード: 作成者: 屋嘉比, 潔 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10466/0002003148">http://hdl.handle.net/10466/0002003148</a>

氏名	屋嘉比 潔
学位の種類	博士（経営学）
学位記番号	第1号
授与報告番号	（甲）第8号
学位授与年月日	2025年3月31日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項
学位論文名	会計利益情報の有用性 —21世紀のパースペクティブ—
論文審査委員	主査教授 向山敦夫（大阪公立大学経営学研究科） 副査教授 浅野信博（大阪公立大学経営学研究科） 副査教授 石川博行（大阪公立大学経営学研究科）

## 学位論文の要旨

本研究は、日本市場における会計利益情報の価値を多角的に再評価し、その有用性に関する新たな知見を提供することを目的とする。会計情報は企業の財政状態および経営成績を測定する尺度としてファンダメンタルな役割を果たしており、その適時性と価値関連性は多くの実証研究により検証されてきた。しかし、情報環境の変化や技術革新が進む21世紀において、従来の知見を再検討する必要性が高まっている。本研究では、適時性、信頼性、情報開示行動、新技術の応用といった複数の視座から会計利益情報の有用性を検証した。

第一に、Ball and Brown (1968) の枠組みを基に、日本市場における会計利益情報の価値関連性を再確認した。本研究では、2001年から2021年の日本データを用いて、Ball and Brown (2019) の追試を実施し、当期利益情報および次期予想利益情報が株価変動に与える影響を分析した。分析の結果、わが国においても会計利益情報が株価変動に対して依然として強い影響を持つことが確認され、会計利益情報が現代においても市場で重要な役割を果たしていることが示された。

第二に、監査進捗状況が財務情報の質に与える影響を検討した。監査が未完了の段階で開示される財務情報には利益訂正リスクが高いことが確認され、監査の完了が決算発表の信頼性向上に寄与していることが示唆された。さらに、監査進捗度と会計発生高の質の間に正の相関があることが明らかとなり、監査の進捗状況が適時開示と信頼性のバランスを取るうえで重要であることが示された。

第三に、代替的情報の普及が会計利益情報の相対的価値に与える影響を分析した。特に、経営者予想修正が減少する状況下で、四半期決算短信が決算発表における市場反応に与える影響を明らかにした。分析の結果、経営者予想修正が行われなかった場合には、四半期決算短信が重要な情報源となり、投資家行動において大きな影響を及ぼしていることが示された。

第四に、機械学習技術を活用した利益予測の可能性を検証した。本研究では、決定木系アルゴリズムを用いて、利益予測モデルの有効性を評価した。結果として、従来の統計手法を超える予測精度を達成するとともに、利益予測モデルを基に構築した投資戦略が異常リターンを生む可能性が確認された。これにより、情報技術が会計情報の分析において新たな展望を提供することが示唆された。

これらの知見を基に、本研究は、会計利益情報の有用性が依然として高いことを示すとともに、情報環境の変化や新技術の進展がその価値に与える影響を明らかにした。また、決算発表時の監査進捗度の向上、適時開示の質の改善、機械学習技術の活用といった政策的・実務的示唆を提供し、日本市場における情報開示制度や市場効率性の向上に貢献する可能性を提示した。

本研究の成果は、21世紀の情報環境における会計利益情報の再評価を進める重要な一歩であり、学術的発展および実務的適用における新たな視点を提供するものである。

## 論文審査の結果の要旨

本論文は、日本市場を対象に、会計利益情報の有用性を多角的に再検証し、その役割や意義を改め

て評価したものである。資本市場において会計利益情報が投資家の意思決定に重要であることは、Ball and Brown (1968) 以来、多くの研究で繰り返し示唆されてきたが、情報技術や監査・開示制度の変化が進む 21 世紀において、従来の知見が同様に維持されるかどうかは必ずしも明らかではなかった。本論文では、こうした問題意識のもと、1) 伝統的な枠組みに基づく会計利益情報の価値関連性を日本市場で再確認し、2) 監査の進捗状況や経営者の予想修正行動によって財務報告や四半期決算情報の相対的価値がどのように変化するかを分析し、3) 機械学習技術による新たな利益予測の可能性を検討した。

第 2 章では、会計利益と株価の関連性を Ball and Brown (1968) の手法に基づいて再検証したところ、決算発表前後の株価変動が実績利益や経営者予想利益に強く反応しており、わが国においても会計利益情報が依然として投資家の意思決定において重要な役割を担っていることを確認した。特に、同時開示される次期予想利益情報や修正予想の存在が、当期利益情報と相互に影響を与え、株価形成に明確な反応をもたらしている点は日本市場の特徴的な慣行に鑑みれば興味深い結果といえる。

第 3 章では、監査進捗度と財務報告の質との関係を分析したところ、監査が未完了の段階で開示される決算短信には、後日利益訂正が生じやすいというリスクがみられることが判明した。また、監査進捗度と会計発生高 (accounting accruals) の質にも正の関連が観察され、監査の完了が開示情報の信頼性を裏づける重要なプロセスとして機能していることを示唆する証拠を得た。これらの知見は、適時開示を重視する日本市場にあって、監査が決算発表に先行する意義とともに、監査完了のタイミングと情報の信頼性を両立させる難しさを浮き彫りにしている。

第 4 章では、経営者による業績予想修正の実態を検証し、四半期の時点で事前の修正が行われない場合には、決算発表時の利益反応係数が高まることが確認された。これは、適時開示の件数が減少している近年の傾向で、四半期決算短信が投資家にとって相対的に重要な情報源となり得ることを意味する。四半期報告が廃止され、決算短信へと集約される制度環境の変化を考慮すれば、こうした情報開示行動と市場反応のメカニズムを解明することは、企業側だけでなく政策当局にとっても重要な示唆を与えよう。

第 5 章では、機械学習技術を活用した利益予測モデルを構築し、従来のロジスティック回帰よりも高い予測精度を達成するとともに、予測に基づいた投資戦略が異常リターンを生む可能性があることを確認した。これは、企業の財務データに含まれる非線形性や相互作用を機械学習がよりの確に捉えられることを示唆する一方で、市場の効率性に対する新たな挑戦にもなりうる。日本市場では経営者予想やアナリスト予想が従来から積極的に活用されてきたが、これに加えて、非線形的な特徴量 (feature) も解析できる機械学習が今後さらに利用される可能性は高い。

総括すると、本研究は 21 世紀の日本市場を念頭に、会計利益情報が依然として投資家行動にとって不可欠な情報源であることを実証するとともに、監査進捗度や情報開示行動、新技術の応用が財務報告の質や利益予測の精度に与える影響を示した。監査の完了時期や適時開示の戦略をどう制度設計に反映させるか、あるいは機械学習による利益予測をどの程度実務に取り入れ、企業や投資家が活用していくかなど、政策的・実務的に重要な論点が多く浮かび上がっている。特に四半期決算短信が任意化に向かう可能性もある今後の日本市場において、会計情報の適時性と信頼性をどう両立させ、さらに新技術の活用と整合させていくかは、企業・投資家・規制当局の三者にとって大きな課題となろう。本論文の成果が、こうした議論の一助となることを期待したい。

本審査委員会は、本論文に加えて、査読付き論文数 3 本および学会報告 9 回という在学中の業績についても確認し、慎重に審査を実施した。審査委員からは、会計利益情報について広範かつ非常に精緻な分析を実施している点、および在学中の業績が博士論文の提出水準に達している点が評価された。その一方で、将来的には、論点を絞ったうえでより深遠な分析を実施することが重要であるとの指摘があったが、個々の論点について首尾一貫した議論を展開し頑健な証拠を提示するに足る十分な能力を兼ね備えていると判断した。最終的に、審査委員の意見は、本論文の内容が博士論文の水準に十分達しているということで一致した。よって、本審査委員会は、本論文が博士 (経営学) の学位に相当するものと判断する。